

# “日本式”学校体育のよさを途上国へ

誰もが体を動かすことの楽しさを授業として学ぶことができる日本の学校体育。途上国でも、そうした学校体育への関心が高まっています。

写真●高岡 弘

JICA 筑波

研修コース  
学校体育/Physical Education  
in Basic Education

受託機関  
国立大学法人  
筑波大学



アルティメットという競技の授業体験。研修員が生徒になり、コースリーダーの長谷川悦示さんが教員として指導する。



研修員は道着を着て受け身などを体験。



ソウル五輪の柔道銅メダリストで筑波大学の教授でもある山口香さんが指導した柔道授業の後、みんなで記念撮影。筑波大学副学長のキャロライン・ベントンさんも挨拶に訪れた。

7月7日から31日までの約3週間、ウガンダやジンバブエ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ミャンマー、東ティモール、ソロモン、ツバルの7か国から14人の研修員がつくば市に集まった。彼らは教員や教員養成校の指導者、教育省で体育教育を担当する行政官などで、日本の学校体育について学び、母国での学校体育の普及改善を目指している。

今回で5回目となる本研修は、まず研修員が国で抱えている学校体育の課題を共有することから始まる。そのうえで、日本の学校体育の歴史や制度を理解。さらに、つくば市や都内の学校を訪れ、実際の体育授業を参観しながら、授業の組み立て方や実践方法を学ぶ。続いて実際に授業作りや模擬授業を行い、最後に自分たちの国でどんな授業や施策ができるのかを検討し、帰国後の行動計画を作成する。また、弓道や柔道、剣道の実技体験は、日本の伝統的な武道に触れる貴重な機会となった。

学校体育の現状や解決したい課題は国ごとに異なる。運動の知識・技能の向上だけではなく、思考力・判断力・表現力や、学びに向かう力や人間性を育むこともめざし、健康や保健について学ぶ日本の学校体育。帰国後、研修員たちは自分たちの国に合った形で取り入れていく。

■JICAの研修とは：途上国の多様な分野の中核を担う人々を招き、各国が必要とする知識や技術を学んでもらうもの。日本で行うものと日本以外の国で行うものがある。

## この研修で学べること

### 学校体育の現場を学ぶ

小・中学校を訪れ、体育の授業や部活動の様子を見学する。子どもたちの声かけや一人ひとりを見て行う教員の指導に驚く研修員も。「なぜ子どもたちは先生の言うことを聞いて、その指示通りに動くことができるのか」「それぞれの子どものレベルにどうやって合わせるのか」といった質問が次々と発せられた。



都内の小学校での体育授業参観。



つくば市内の中学校で部活動を体験。

### 授業研究から学ぶ

授業を他の教員に見てもらい、よりよい授業に向けて意見を交換しあう日本の授業研究を学ぶ。ひとつの授業を作るまでや授業の後にもほかの教員たちと意見を交換しながら進めていく方法は、体育授業が確立していない研修員の本国で、自分だけでなく周囲の教員たちのスキルアップにもつながる。



都内の小学校では授業研究に参加した。

## 研修員's Voices

国としても体育教師の育成に力を入れていて、8年前に初めて大学に体育教師を育成する学部ができました。見学した授業研究を参考に、学校全体で体育の授業内容を向上させたいと思います。



聖ペーター中学校 スポーツ部 スポーツ教師 東ティモール デ・デウス・エリアスさん



体育教師としての技術や経験を磨き、授業の質を向上させたいと研修に参加しました。とくに、子どもたち自身が授業の目的を理解し、自由に楽しんで授業を受けているのが印象的でした。

ジバ小学校 体育教師 ジンバブエ シバンダ・シボノク・レさん



筑波大学 体育専門学群 准教授 長谷川悦示(はせがわ・えつし)さん 教育学修士、体育学修士。筑波大学大学院修了。身体教育学、スポーツ科学、IT教材を活用した体育授業の研究などに携わる。2017年度からJICA研修「学校体育」コースのコースリーダーを担当。

## コースリーダーの目

### 体験をシェアし、ともに考える研修に

日本では、小学校から高校まで体育の授業は必修で、さまざまな運動技能を習得することができます。しかし途上国では、グラウンドや体育館が整備されていないところも多く、そもそも学校のカリキュラムに体育がないところもあります。

2013年、日本政府はスポーツを通じた国際貢献「Sport for Tomorrow (SFT)」を掲げ、14年から20年の7年間で100か国、1,000万人以上にスポーツの価値を伝えると宣言しました。その一環として15年から始まったのが、途上国の人々に日本式の学校体育の価値を知ってもらうこの研修です。

研修で大事にしているのは、実際の授業や教員による授業研究を体験してもらうこと。「日本の授業は素晴らしいが、私の国ではできない」「グラウンドも体育館もないんだ」とあきらめの表情を浮かべる研修員もいますが、自分の国ではなにが実行でき、なにを取り入れることができるのかを考えることが大事です。そしてそれらを研修員同士でシェアし、ともに考えることができるようなカリキュラムを組んでいます。

また、タブレットやPCで授業分析ソフトを活用し、講義や授業をふり返ることを習慣つけます。それによって、帰国後も同じソフト

を使い、自分の授業を向上させることができます。昨年参加した東ティモールの研修員が、帰国後授業分析をしながら取り組んだ授業のビデオを送ってくれたことがあり、研修の成果が生かされていることを実感できました。

今日の日本の学校体育が目指すのは、誰もが楽しみながら身体を動かし、仲間と協力してそれぞれの達成感を得られること。そのために日本の教員たちは授業研究を通してよりよい学校体育を探求しています。これからもこの日本式の学校体育と授業づくりの方策を伝えていきます。